



Title	外遊余禄（二）
Author(s)	森沢, 三郎
Citation	大阪外大英米研究. 1961, 2, p. 111-124
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98935
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

外 遊 余 録 (二)

森 沢 三 郎

ニ ュ ー ヨ ー ク

同窓で少し後輩のM君にくっついて、かれが自動車を預けてあるパーキングの会社へ行く。M君の顔を見ると係員が早速二千台くらいの自動車の中からM君の自動車をエレベーターでおろして、われわれのいる所まで運転してピタリと停めた。もちろん鍵を預っているのだ。

ダウン・タウンの自動車の預り賃は現在のところ1ヶ月70弗くらいで、邦貨に換算すると大学を出て何年かになる普通のサラリーマンの1ヶ月の俸給が軽く飛んでしまうわけである。しかも事務所からそこまではタクシーの欲しい距離にあることが普通だから大して便利とはいえない。

「ニューヨークって町はテエしたもんだ。世界中から気の利いた奴はみなここに集る。各国の大使館も全部ここにある」といった調子でタクシーの運転手が自慢を始める。乗り合わせた若いS君が「大使館はワシントンだろう」と反問すると「冗談じゃない。ニューヨークにきまっている」と言下に応酬する。どうやら国連大使のことを言っているようだが、語調がきわめて断定的で少しの疑念をも抱いていないようだ。

次にこの車中のみなさん方の中でどの人がニューヨークに一番長いかを当てて見ようかと言い出した。そしてM君、S君、それから私の順序に難なく言い当てた。S君は最近ニューヨークに来たのだから、かれにも増して私の目付きに落ちつきがなかったと見える。M君は「なあに、顔色を見ればすぐ判るのですよ。何しろ自動車の排気ですられますからね」と慰め顔に私に言ったのち、「この人はボクが大学で教わった先生で、アメリカのことは君なんかよりずっ

とよく知っているよ」と高っ飛車な反攻作戦に出た。すると運転手は「なんだ。それを早く言ってくりゃ良いのに」とちよっと消気て見せたが、すぐまた元気を取りもどしてしゃべり続けた。

「自動車の排気から逃がれよう」というスローガンの下に対岸のニュージャージーあたりへゴルフに出かける日本人の数は相当なものらしい。以前は日本人を見るとジュード・イストかと尋ねたのが、この頃ではゴルファーですかと尋ねることが多いとか。それに日本人は人の知らぬ中に練習してあつと言わせようという考えの人が多から、非常な気の入れ方で、とかく抜け駆けの練習にいそしむ傾向がある。某商社の駐在員が一番のりのつもりで六時すぎに行つて見ると、黒板にはすでに先着の一组の名が記入されていたそう。

カナダのトロントから一飛びにアイドルワイド飛行場につき、そこからダウン・タウンに到る道路や河底トンネルの感じはいかにもニューヨークらしくメカニカルなものであった。自動車が道路上のそれぞれのスピードのコースに入るとそれからあとはそのコースを離れることなく、全く一本調子に高層建築の谷間を縫って間断なく転つて行く。まるでおもちゃの自動車の中に蠟づけされたようで、こんな状態が長く続くと考えたり、感じたりする機能は消滅しそうだ。

到着の当日訪問したい先があったので、路上で一二回道を尋ねたが、聞きしにまさるそつ気なさであった。しかしこれはその日が土曜日で、しかも午後になっていたこともその一因であるのに気がついた。どの人も家庭に帰ってウィーク・エンドを楽しむのに気がせいいていたことであろう。（事実、他の曜日には大ぶん気分が変っているようであった。あるおじいさんは「おれはおまえが乗り間違えることを好まない」といって、態々地下鉄のそのホームまで付添ってくれた。）同じ日の夕方、リバーサイド・ドライブの方へ歩いて行き南下するに従つて映画「波止場（ウォーターフロント）」のような雰囲気の中で、しかも森閑として人影を見ぬただっ広い場所に出てしまい、急に不気味になって早々退散した。

「京にいなかり」という言葉は、ニューヨークのような大都市には特によくあてはまる。「サバブに行こう」ということは、厳密な意味の郊外ではなく、マンハッタンの中でも、息づまる感じのやや少いところという意味に用いており、たとえばコロンビア大学辺から北の方などは当然その中に入る。現在市の事業として新しいアパートに建て換えているシチー・ノース・ビレヂなども同じ考えに基づくものであろう。そういえばグリーニッチ・ビレヂなども往時はそれに似た関係にあったであらう。ニューヨーク市と言っても、チャイナ・タウンがまだエンクレーブ（飛地）の扱いを受けていた時代もさまで遠くないので、様々の発達過程を経て今に至ったことは言うまでもない。

マンハッタンの地盤は固く、シチー・ノース・ビレヂの土木工事を請負っているコン・エヂスンも「ニューヨーク発展のためには掘り返さねばならぬ」という弁解的な看板を路上に立てて仕事を進めている。とは言いながらもドリルの物凄い騒音には気が引けるであろう。

マンハッタンの岩盤がさわやかに露呈している姿を見るには、セントラル・パークを南側から入って行くのが最も手っ取り早い。巾二マイル、奥行八マイルというこの大公園には監視の目の届かぬ所があり、時々新聞種を提供する。私の到着する少し前にも日本外務省の女子職員がちんぴらに脅された事件があった。「ねえちゃん。すごく良い着物を着てるじゃねェか」という風に因縁をつけられて時計や腕環などを捲き上げられたというのである。

私の知人のU君もこの公園の中で危禍に遭った。自動車の入口を内側から締めることを忘れて公園の中で停車していると、矢庭に一人の黒人が飛び込んで来てピストルを突きつけ「金を渡さなければ頭をうち抜くぞ」とすごんだ。幸にもこの男はその直前に他の所でも強盗を働き警察が追跡中であつたから、難なく逮捕となり、盗品もすぐ返された。あとで判明したところでは、かれはドラグ・アダクトというから、ヘロイン中毒患者か何かであろう。禁断症状の恐怖に駆られて、ホールド・アップの真似事をしていたもので、ピストルもちゃんな玩具であつた。しかしU君は、この事件に関係したイタリー出身の警官の懇

請によって「パトロールマン・デミーナは生命の危険を冒して格闘の末兇悪犯人を取り押え、私を救助してくれた」という意味の証明書を書かされた。

また新聞紙には「英語が不自由な若い裕福な日本の工業家」と書かれている。大体U君は国籍こそ日本だが、アメリカ生れで英語は自由自在といってもよく、それと反対に大して裕福でないこともほぼ確実であるが、金をたんと持ち西も東も判らぬ人間に仕立てた方が警官の功績を目立たさせるに有効なテクニクとして新聞社も協力したものらしい。ともあれU君はニューヨーク・タイムズに三段抜きで報道される最初の日本人ではなかろうかと取沙汰されている。

この話にはなお後日談がある。事件後間もなくU君は社用で領事館を訪れた。用談中何かのはずみで領事は評判のセントラル・パーク事件のことに触れ、ニューヨークではよく用心なさらぬといけませんよと注意した。U君は自分が当の本人であることをぶちまけたものかどうかと、大分思案をしたそうである。

ワシントン・D.C.

ワシントンではG博士の好意によりその家の客となって二夜を過した。英国でシェクスピアゆかりの地を旅行した時一緒になった医師である。病院と子供とを人に任かせて一ヶ月休暇を取り夫妻で欧州各地を旅行しているという話であった。オクスフォードでも偶然落ち会って親近感を深めた。その時の話では令兄も医師であり、しかも著名な学者で、オクスフォード大学の医学部に交換教授として来ているとのことであった。そういえば、この由緒の古い大学でも、近年次第に理科方面の充実を計り、ケンブリヂに追いつき追い越そうと意気込んでいるということはおかねて聞かされていたところで、殊に戦後は米国の科学者を多く招いているそうである。

「マウント・ヴェーノンやあちこちを案内するから是非来たまえ」と繰り返して言われていたので、ともかく言葉をかけようと、ワシントンのユニオン・

ステーションに着くと早速公衆電話のダイヤルを廻した。ところが黒人らしい訛をもった女中さんしかいない様子で、要領を得ない中に電話が切れてしまった。すると係りの婦人がきつさと病院の番号を探してくれて、うまく通話が出来た。「ここはニューヨークとは違う」と、私が思ったままを口にすると、わが意を得たりといわぬばかりに交換嬢同志でうなずき合った。ローカル・ベートリオチズムというか、土地土地でそれぞれ自慢の種には事かかぬものだ。

やがて令嬢二人をも乗せたG氏の自動車が駅の前に現われた。それから同氏の邸宅へ行く間、ここかしこで自動車に向って笑顔で手をふる人がある。聞いて見るとGさんは産科の医師で、その関係上顔が広いのだという。なお良く聞くと米国では（すべての州がどうかは知らないが）産婆を認めておらず、分娩はすべて産科医の手で行うとのことである。

Gさんは私の荷物を家におろすと公園に案内するといって、野趣の多いパークに乗り入れ、ボトマク川の水上（みなかみ）遠くドライブしてくれた。モントリオールについて以来アメリカ大陸の旅行は随分と人さまの自動車のご厄介になっている。ワシントンもその例にもれず、到着の翌朝はG夫人がメリーランド州ベセスダにあるヘルス・センターまで自動車で送ってくれた。米人の発音では大抵ヘルス・セナーと聞こえるこの研究所兼病院には、薬学専攻者である私のいここが来ているので、ワシントンの市内に行くにはかれの自動車に頼るつもりでいた。ところが病後であるので用心して、かれの同僚のスイス人の医師が代って送ってくれた。ワシントンの市中見物には、ホワイト・ハウスの新聞記者会見から帰って来たばかりのT君がその自動車で案内してくれ、最近のニュースを織りまぜて説明してくれたので、有益でもありまた楽しいドライブであった。このように言えば、はなはだ心臓の強い行動のように聞こえるかも知れないが、広大な国土にはそれに相応した強力な足が必要だということから来た止むに止まれぬ成行きと見ていただければ幸いである。

ワシントン市、もう少しくしかつめらしく言えばコロンビア特別区は、合衆国建国の始めヴェージニアおよびメリーランドの両州から土地の供出を得て全国

の主都として成立したものであるが、その後ヴァージニア州の供出した土地は十九世紀の中頃に再びヴァージニア州の所屬に歸した。ともかくこうした関係から同市は最初から南部の一端に位置を占めている。現在のワシントンは、言わば各州から政務のために出向いて来た人々の足だまりの場所である。もちろんこの市に根をおろしている住民も多数あるが、建前としては各州から出た人の集合地であるというのが特別区の特別区たるゆえんである。この特別区の政治については最初は議会から自治権を認められていたが、市政の失敗を機会として 1847 年には自治権を奪われ連邦議会の統轄下に入った。従って市政の方針を立てるのも議会の責任となっており、行政面は大統領の任命にかゝる弁務官（委員制）が見ている。民主政治の中樞をなすはずのワシントンが、このように一種の總督政治の形を取っていることは一見不似合にも感じられる。

事実ワシントン D・C に自治権を与えよという要請は年々議会に持ちこまれているが、いつもきまったように握りつぶされている。要請する側でもまた当然のこととしてそれを見越している。いわば馴れ合いによるジェスチャーに過ぎない。かりにワシントン D・C に地方選挙を行ったとすれば市長の地位も市会の多数党も黒人人口によって占められる公算が極めて大きい。ワシントン市ではすでにそれほど黒人の数が多くなり、それが一そう白人のメリーランド州その他への逃避を助長している。カナダ、アメリカの多くの都市を通じて市内のやや古くなった住宅がイタリーその他からの移民の手に歸し、白人系の先住者は郊外地に移ってスーパー・マーケットに依存する生活様式に切り換えつつあることは一般の傾向であるが、ワシントンは先住の白人に取って代るものが黒人であるという点に苦しい特長があり、米国の将来についても深い示唆を含むものと思われる。

合衆国の国会議事堂があるキャピトル・ヒルに対し、ワシントンではホワイト・ハウスをダウン・タウンという。「ダウン・タウンではこう言っている」とは、大統領の意見を指していることが多い。他の多くの都市ではダウン・タウンと言えど先ず商業区である。官庁と樹木の多いこの市にも、もちろんそう

した商業区あるいはショッピング・センターというものは備っている。そしてその一端にリンカーン・ミュージアムがある。

リンカーンが米国の民衆から捧げられている敬慕の情はもとよりその人物の傑出したことによっているであろう。よく物事の本質をとらえ、簡潔な雄弁の中に指導的な理想を定着させ、勇気と忍耐をもって難局に処して迷うことがなかったのはまことに大政治家の名を恥かしめない。誠実さとユーモアをもって生地そのままに民衆に接したかれのゆたかな人間味は古今の歴史の中にもたぐい稀なるものであるに相違ない。しかし何といってもかれの一生に一段の光輝を放たしめたものはその悲劇的な幕切れである。ミュージアムにもかれの最後に関係する遺品が多く陳列されており、一種悲壯な気分を漂わせている。暗殺者ブースが用いたグロテスクなピストル一つにせよ、見るものの心にリンカーンの国家に対する献身の感じを一そう切実ならしめるであろう。

リンカーンと違って無事に天命を終えたジョージ・ワシントンについてはおびただしい偶像破壊的な記述がなされたが、建国の祖としての民衆の尊敬にはかわる所がない。Gさんも「もう二日泊って行きたまえ。そうしたら身があくからお約束のマウント・ヴァーノンに案内しよう」と熱心に引き止めてくれた。また「大体にワシントンに三日しか宛てないなんてバカだね」とも言った。しかし私は先々に取りきめている予定を狂わしたくないので折角の好意を謝絶した。たとえ米国人でなくても、およそ人間である以上、ジョージ・ワシントンの住みついて骨を埋めたマウント・ヴァーノンだけは見るべきであるというGさんの気持にはついて行きにくいところのあったことも事実である。

デ ト ロ イ ト

「子供の時分には、カナダは合衆国の南にあるという感じをもって育ったものですよ」とデトロイトのウェーン大学の学長補佐を勤めているマコーミクさんが言った。カナダと合衆国の境界線にも、所謂オレゴン紛争の結果としてあ

っさり引いた西半分の国境のように直線的な部分だけではなく、東の半分ほどは相当入り込んでおり、五湖地方などは殊にそれが甚しく合衆国領の半島がカナダ領の北側に突出している所もある。デトロイト付近にもそうした方位的に倒錯感を与える例がままあるというのがマコーミックさんの言わんとするところであった。

マコーミックさんはフルブライト計画による派遣教授として大阪外大に一年間を過ぎたので、家族ぐるみ旧知の間柄であり、令息や令嬢が徹声を挙げて迎えてくれた。日本から持ち帰った調度品を一面に飾ってある部屋で角力の話をしたり、折鶴の手順を忘れかけた令嬢に何かと差出口をしたりしていると、いつか京都御所の近くにあったマコーミックさんの家を訪問しているような幻覚にとらわれる。夫人も知田グループと見られているらしく、日本からの知名の訪問者の接待や案内をそれぞれの筋から依頼されることが多く、お蔭で日本語もまだいくらかは覚えていますよといていた。

ウェーン大学はもと私立であったのだが、私の訪問する少し前に州立となり、ウェーン・ステート・ユニバーシティーと呼ばれるようになった。この数年来大学その他への寄付に関して税法上の優待措置が縮小されたので、私立学校は経費面の圧迫が甚しくなり、州立、市立などに切り換えるものが多いと聞いていたが、ウェーンもその途をたどったわけだ。

私立といっても英国のオクスフォードやケンブリッジのように経費の80%程度国費で賄い、運営面は大学に任せるというのであれば、国立私立の長所を合わせたようなもの（少くともそうなるべきはず）であるが、米国では州立といっても州の間の貧富の差が大きいので、経済的に恵まれぬ州の場合にも教育の機会均等の立場から連邦政府が面倒を見なければならぬことになる。しかしその場合でもカリキュラムの決定は州自体の責任とされている。それは単に地方地方に適合した教育を施すというような程度のものではなく、むしろ州の独立を重んずる建国の趣旨からも当然過ぎるほど当然なことである。

ウェーン大学の英語学科にはマコーミックさんより少しおくれて大阪外大の客

員教授として来日したベドフォードさんも教鞭を執っており、その夫人は日本人なのでベドフォード家はウエーン大学関係の東洋人クラブのような観を呈している。夫妻でエアーポートまで出迎えて下さった。因みにこのエアーポートはミシガン大学の経営にかかるもので、ミシガン大学はその基金をこれに投資してエアーポートからの収益で種々の経費を賄っているとはアメリカで聞いた話であるが、フルブライト計画による研究のためミシガン大学から来日した某教授から最近聞いたのは少し含みの違ったもので「この飛行場からの収入は全部技術の研究に向けられており、技術といっても現在の情勢の下にはそれは軍事的性質のものとなり易い。自分は平和主義者であるから全くあずかり知らないが、もともとそれを条件として軍が飛行場の管理権を大学に委ねたといういきさつがあるので、止むを得ないことである」とのことであった。旅行者のあわたたしい見聞が当てにならぬ一例である。

自動車工業の町デトロイトはどのようにかゴミゴミしたところであろうと思っていたが建築物の敷地にもゆとりがあり、街中も広く、かなり見られる町である。特にセント・クレア湖に沿った公園など豊かな木立ちが水に映えて快い。フォードの工場は市内からかなりの距離であるが、自動車のギヤの形に作られたロタンダという名の事務所まで自動車を飛ばし、そこから専用のバスに乗せてもらって組立工場と圧延工場を見た。高速撮影による昆虫の変体を見るように、見る中に車台にもろもろの部品がくっつき、座席が右横から押し入れられて忽ち新車が出来上り、引渡し前の、地下足袋を思わせるような黒色のタイヤをはめて試運転となる段取りは自動車工業の行われるところ何所でも同じであろう。ただ両工場を通じ案内人が数字をまくし立て、その規模の大きさを強調したそのすざましいスピードは確にアメリカ式であった。一日の中にこれほどいきをつく間もなく、あきれ返るほど大きな数字を聞かされたことは日本語、英語を通じて生れて始めての経験であった。

私は自動車産業が恐ろしい不況をかかっている時に行き合わせたが、それでも船や汽車によって新車を出荷している状況は何回か目に触れた。スペース

を極端に節約して貨物車に自動車積みこんだ格好をピギーバック（豚の背中）と呼ぶのは、良くも名づけたものである。ピギーバック、またはピッカバックとは人間の場合には肩車にしたり、背に負ったりすることを意味し、鉄道ではもっと広く、車両の上いきなりコンテナなどを載せる方式を指していることもあるようだが、何といってもいなが重なり合ったように自動車の積み込まれた姿こそ本当にピギーバックという言葉がピッタリしているように思われる。

自動車工業の景気不景気によって労働力の調節は当然必要であり、時に多数の臨時工を導入する。それらの人は多くは南方からやってくるスペイン系の人だというのが、かれらに能率的に英語を教え、近代産業の要員として適格者たらしめることは、ミシガン大学やウエーン大学にも要請される課題であり、外人に対する英語教授法の問題が特に熱心に研究されているのも自然のいきおいであろう。スペイン語と云えば、シカゴの飛行場でも英語のほかにスペイン語のアナウンスをしていたことを思い出す。

五月の終りに近いある日、デトロイトの町を歩いているとガソリン・スタンドの前に棺おけが置いてあり、黒い服を着た紳士が花に飾られてその中におさまっている。近よるとどれもこれも作りものであるが、その片傍に立てかけた「謹告」に始まる手紙体の掲示の奇抜なのが目を引いた。いわく。

「メリー、そなたにも、子供たちにも、ほんとに済まぬことをした。こんどの休日にはみんなで楽しいドライブをする約束であったが、メモリアル・デーに酒を過ぎ、自動車は大破、自分もこの始末だ。世間の人にもこれをよみせしめにして欲しい。さようなら。」

メモリアル・デーから6月1日に至る3日間は夏のシーズンを迎える楽しさに心も浮きたち、例年自動車事故がおびただしい数に上るそうで、3日間の全国統計の予想を出している新聞もあり、ロス・アンジェルスへ行った時も「今年は予想よりも少し下廻りましたよ」という物足りなさそうな話も聞いた。

全国統計といっても、南部諸州ではメモリアル・デーの日取りが違っている

ところもある。他の国もそうだが、まして広いアメリカのことは、到底一口には言いきれない。

勤 ち が い

旅行者の早合点はむかしから笑ばなしの種になっている。生来スローモーションの私が柄にもなく空路を利用し、文字通りうわの空で世界を一めぐりしたのであるから、いざ筆を取るとなるとあぶなしくて筆が進まない。

偶然ぶつかった特殊な出来事に一般的な意味を与えようとしたり、反対に全くありふれた瞩目に悦に入ってしまうというたぐいが定めし多いであろう。しかもそれが常に観察の前景を塞いで広く大きな背景を視野から閉め出すに至っては、社会学者テニースの名言を立証するようで、よい面の皮である。いわく。旅は賢者をますます賢くし、愚者をいよいよ愚にする。

帰国後然るべき文献で旅行中の見違えや間違えを正したり、現地からの訪問者を迎えて念を押した結果ゆがんだ印象が改められたりした例もいくらかあるが、ここではそのような時間的な間隔を置かず即時にその場所で感違いにブレーキをかけられた、私にとって幸運な事例の二三をお話したい。

()

「アテネはアクロポリスとリカベトスの2つの丘の間に市街を発達させた。ゆえにこれらの丘を目標とすれば道に迷うことはない。」という耳よりの記述を旅行案内で読んだ。これを信用し過ぎたため私はアテネでは他所よりも却って多く道に迷いタクシーの世話になった回数も多い。そのタクシーの運転手も「この頃街が放射状に拡って行くのでとても分りにくいんです」と言っていた。「だから自動車を利用する方が賢明だ」という商売上の宣伝かも知れないが、街角に立ちさえすればどこからでもアクロポリスやリカベトスが見えるものではない。潜望鏡のような役目を果たすロクロク首でも持っていれば話は別であるが。という訳で市中をうろついていると、ギリシャ文字でグリコと書い

た看板があちこちで目についた。グリコといえはおまけの賞品で子供たちに人気のあるそういう名の菓子が日本にあるはずで、赤い箱の表に両手を挙げて走る運動選手の絵がかいてある。数年前の不景気時代に聞いた話では、ともかくも倒れないように遮二無二に生産を続ける「自転車操業」に対し、もう完全にお手上げになりながらまだ走っているのを「グリコ操業」といていたそう。これはグリコに対して誠に失礼な言い分だが、一方において「グリコ製品がアテネに現われた」と提灯をもつ形になった以上、いやなことも少しは辛抱してもらえるであろう。

それにしてもグリコの看板が余りにも多いのは腑に落ちないので、ホテルに帰ってマネジャーに聞くと、グリコとは現代ギリシャ語で「菓子」の意味だという。そう聞けばああ、グリコーゲンのグリコかとすぐ合点がゆくのだが、我ながら血の巡りの悪いことであった。

(二)

ロンドンに滞在中のある日、ベルグレーヴ・スクエアにある日本大使館に行った。ベルグレーヴィアンという形容詞も出来ているほどにさすがに落つきのある場所で、日本の大使館は聞き及ぶ戦前の豪華さに比していかにも小じんまりとした簡素なものである。

さて用件を済ませてホテルに帰るためスクエアの東側に沿って歩いていると、とあるやや古めかしい住宅の玄関脇に「バイロン卿旧居・1816—1823」と記した看形の板が打ちつけてあり、数名の男がシネカメラのような物を据えて撮影の準備をしている様子。そこで一足お先にその家を違った角度から二枚くらいスナップして、すたこらその場を引き揚げナイツブリジの地下鉄乗物に向った。やや暫くして後ろからパタパタと走って来る足音が聞こえる。ふり向くと最前撮影に來ていた連中のうち一番年若な青年である。やっとな追いつくとかれはいきを切らせながら「あれは真似事ですよ」といった。よく聞いて見るとバイロンのテレビ劇をやるためにロケをしていたもので「来週月曜の夜8時か

らやります」と言い添えた。もちろんテレビ番組を教えるために来たのでなく、私が「バイロン卿旧居」を真に受けているらしいのに気付いていそがしい仕事の中からこの青年を走らせてくれたものであろう。文化的な仕事に携わっている人として当然だといえればそれまでであるが、行きずりの私に対してこのように気を配ってくれたのは何といっても有難いことであった。

(三)

カラー写真の題材、それも人物となると、どうしても受くるしい子供や色彩に富む婦人にカメラを向け易い。ベルサイユ宮殿を出たばかりの街路で色鮮かな三角帽を冠り直して横隊になり調子を取って歩いてくれた3人の少年など、まことに美しく楽しい題材として忘れ難い。フランクフルトで、メイン川の岸で出くわした、子供を皮紐の先に縛って歩かせる様子を快よく撮らせてくれたドイツの若い母親も魅力のある対象であった。

ところがニューヨークへ来るとフォトジェニックな風貌（私の目から見て）の婦人にとんと出合わないのに閉口した。セントラル・パークやRCAの屋上などで元気のよい少年少女を写すくらいが関の山であった。ムービーカメラを持っていたならばもっともっと好材料に恵まれたかも知れない。事実ニューヨークの婦人のもっている美しさは動の美と名づくべきものであろう。スチルになるとどうもきつい感じが伴う。しかも互に競争に負けまいとして人工の限りを尽した巧緻な仕上げである。超モダンな女性が映画の中から抜け出して現実の世界に顔を出しているといえれば幾分その光景を暗示し得るであろうか。

紹介を受けてニューヨーク第一と誇称している銀行を訪れた時もそういう感じであった。（この銀行は実際には「ミシシッピ以東最大で、全米で最良の銀行」といっている。ニューヨーク州法によって州の外に支店を持たないので大ききの制約を受けるのは止むを得ないという説明であった。）またウォール街に名を知られた証券業者の事務所で事務を執っている婦人も、というよりは有力な会社になればなる程、益々けん高い感じで、美しさよりもすざましさが先立っていた。生存競争の激しさが婦人の容貌や態度にもそうした尖鋭な気分を

もたらしめていると言ってもあながち無理ではあるまい。

ある日5番街の30丁目くらいの所を北に向って歩いていると15、6才の少女を伴った母親に出くわし、はっとして立ち停った。というのはその少女のもっている雰囲気は清楚そのもので、夏近い歩道に一脈の涼風を導く趣きがあったからである。私は無意識にカメラを持ち直したが、付添のお母さんに一応断っておくべきだと気づき、「ニューヨークの土産にお嬢さんの写真を一枚撮らせて下さい」と頼み込んだ。すると母親は「結構ですが、たゞ私たちは実は英国人なのです」と答えた。これは私が飾気のない生地的美しさを尊ぶことを読者に印象づけようとしたり、または英国的な趣味をもつことをほめめかしたりするものでもなく、ましてニューヨークの、ことに実業界に立ち働いている婦人たちをおとしめようとするものではない。ひとえに、私が、世界の都ニューヨークであることを忘れ、5番街を歩くものを一にも二にも米国人と決めてかかった軽率さを告白するための記述である。

ニューヨークに私が滞在した二週間ほどの間でも、もっと違ったタイプの婦人にも随分と出あった。例えば大学の受付で教授との連絡を取ってくれた婦人とか、同じ実業界でも教育界の人々を多く顧客にもっといわれる保険会社の婦人事務員など、よほど変った肌合に感ぜられた。殊に日本商社の支店に勤務している婦人などさすがにさすがに物柔かである。いずれもそれぞれの環境によって生れた差異であろう。環境といっても必ずしもそれぞれの地位について後に起った変化だけを言うのではなく、採用の当初における経営者の好みというようなものをも含めての話しであるが、それも行きずりの印象で根拠のあることとは言えない。